
ヘルムート戦記

鷹原美毅

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ヘルムート戦記

【コード】

N5892C

【作者名】

鷹原美毅

【あらすじ】

大陸暦四〇〇年代。それは、各国が大陸の覇権を巡り、果てなき戦争を繰り返している時代だった。ある者は騎士として婦人と国家を守り、ある者は傭兵として戦闘を繰り返し、ある者は軍人として国家のために英雄たらんとした。そんな時代に、中性的な美貌を備え、戦場にあつては軍神の如き活躍を見せた若者がいた。彼は騎士の道を進む貴族として、戦場を駆ける勇士として、多くの命を預かる指導者として、図らずも歴史を動かそうとしているのだった……

プレリユード

国内の有能な用兵家が集められる『帝国軍参謀会議』という組織が置かれた場所は、英雄ゼフィオンの血を引く『ルシタニア帝国』第二九代皇帝ルーファウス三世の居城『ペルガモン』の城内、統帥本部の一室だった。

多くの衛兵が警備にあたる城内で、一人の騎士隊長が参謀会議室の鉄扉を開くよう命じた。

「ヘルムート・アンゲルス子爵だ。開けてもらおう」

そう名乗った男の容貌を数秒間見つめて一礼した衛兵は、鉄扉を押し開いて声高に言う。

「参謀会議議員・帝国軍イズアル騎士団騎士隊長ヘルムート・アンゲルス子爵、ご来場！」

参謀会議議長の壮年騎士ミハイル・サンチエスのみが、正当な理由で遅刻してきた銀髪の騎士隊長に反応を示した。

「やっと着いたか、アンゲルス卿。エトルランド草原の戦況はどうだ？」

「芳しくありません。第三軍ペリース司令官と第五軍ナルセス副司令官が奮戦していますが、敵軍の包囲網は強固。しかし、度重なるペリース卿の局所集中攻撃によって、秩序崩落が見て取れる部位もありました」

ヘルムートは、彫刻のように整った顔立ちに不安の色を浮かべた。「……第五軍のラウル司令官はどうした？」

問いたただす議長の鋭い視線が、彼の身体を射抜く。

「乱戦の末、愛用の戦斧だけを残して行方不明とのことです」「戦死したと考えるのが妥当だな」

冷静沈着を具現化したような男　ヘルムートと同じく二四歳の参謀会議議員ガブリエル・ラモン侯爵が残念そうな表情で呟く。彼は参謀会議議員で唯一、実戦に参加したことはない議員であるが、

戦略概論の専門家として、世界的に名を知られている男であった。
「どうだかな」

議員の間で『長老』と呼ばれる六三歳の男ヴァレル・シュタインドルフ副議長は呟いた。彼が毒に染まった舌を吐き出そうとしたその時、再び鉄扉が開いて衛兵が駆け込んできた。

「会議中、失礼致します！ 戦況に大きな変化が見られたそうです！」

「して、変化とは？」

ラモン侯爵は、表情を変えずに訊ねた。

「北西方向からの敵増援です」

会議室は一瞬静まり、騒がしくなる。もったいぶらずに、悪化といえよかろう、と意味もないのに毒づいたのは、むろんシュタインドルフである。

参謀会議議長は、当然の言葉を発した。

「静粛に」

会議室が静まるのを待ち、彼は続ける。

「諸君、会議は中断だ。アンゲルス卿、貴殿は所属の騎士団に戻り、騎士達に出陣の準備をさせよ、今すぐに」

そして、全員が胸に拳をあて、静かな祈りを捧げた。

「大神ゼフィオンの祝福があらんことを」

大陸暦四二〇年。ヘルムート・アンゲルスという青年の名が、歴史の表舞台に鮮明な筆跡で残されたのはこの年からである。彼が戦場に駆けつけた頃には、“エトルランド”でのルシタニア帝国とアランドラ同盟国の戦いは、すでに前奏曲を終えていた……。

1 勇躍

帝都から北東に一五〇キロ離れた平野にそびえる『ヴェスヴィオ砦』は、二万の戦闘員と五万の非戦闘員を収容できるように設計されているため、砦というより一つの都市として考えた方が想像に易いだろう。現在、一万七〇〇名の戦闘員の六割はルシタニア帝国の正騎士で、残りの四割は先兵や対外警備兵として活躍する勅選の傭兵隊と、補給・城内警備担当の農民兵であった。非戦闘員のほとんどは、砦内外の農工業に携わり、騎士団に食糧と武具を供給して生計を立てている。

そんな砦の監視塔に立つ、黒髪の傭兵が大声を上げた。

「アンゲルス卿だ、お通ししろ！」

男の大きな返事が、そこからは見えないほど遠くから届くと、すぐに巨大な門は重苦しい音を立てながら動き出す。まず目に入ったのは、自分に向かって頭を下げている衛兵だった。これは義務ではなく、彼に対する敬意の表れだった。

彼らに頭を上げさせると、彼は愛馬を厩舎に預け、兵舎を目指して歩き出した。

兵舎への道を繋ぐ街中では、若く美しい騎士隊長に憧憬の眼差しを向ける者は無数にあり、女性の嘆息も聞こえてくる。緊急時であることは周知の事実のため、話しかける者はいなかったが。

市街地の四方を囲む巨大な城壁には、連弩や岩石発射管が設置された穴などの防衛兵器が用意されている。帝都のきらびやかな装飾とは無縁な城砦都市の軍管轄区に入ると、整列した数千人の騎士が彼に敬礼する。

「準備が早いな」

苦笑を隠しきれない騎士隊長の前へ、壮年の騎士が歩み出た。

「当然です、アンゲルス卿。すでにロメオン騎士団長と先鋒のジャスティン騎士隊長は戦場に発ち、後詰めたる我々もすぐに出立せねばなりません」

「ナダル、お疲れの騎士隊長に強行軍を強いるつもりか？」

それは疑問ではなく、確認であったのかもしれない。

「出陣命令には逆らえません」

皮肉っぽい言葉に相応しい表情さえ浮かべないナダルの兜から覗く顔は、実年齢よりも遙かに老けて見える。

ヘルムートは諦めたように溜め息を吐くと、

「腹ごしらえくらい……」

そう呟き、兵舎に向かった。

ゆっくりとした歩調で兵舎の門をくぐると、救護班以外は誰もいないことがわかった。床には、刃こぼれの生じた長剣や傷だらけの籠手が床に散らばっている。

武器そのものが国家の疲弊を表しているかのような、ヘルムートはそう思いながら、自分の武器に手をかけたが、急いだ様子を見せることはない。戦場に身を投じる者達の全てが、装備の不完全さは死を招くものと考えているのだ。

意図的に空を斬った愛用のクレイモアを鞘におさめ、腰に提げると、白銀の鎧でその身を包んだ美貌の騎士は、今度は早足で兵舎をあとにした。

ヘルムートの愛馬シュトルムは、休む暇もなく厩舎から叩き出されたことが不満だったのか、しきりに首を振って嘶いている。美し

い騎士が愛馬に近づくと、駆け寄ってきたナダルがヴァンプレート・ランスを彼に渡した。

「先鋒の騎士隊もあなたに気を遣って、編制基準よりも三〇名ほど多めの騎士を連れて行きました。だからといって、あなたをゆっくりは行かせませんが」

普段から遠まわしな表現の多いナダルは、遠慮なく自分の上官に告げた。

「……ということは、しばらくは奴らだけで対処できるってことか彼の誰に対しても遠慮のない性格は、この騎士隊長に影響されているのかもしれない、騎士達のほとんどがそう思っていた。」

「さて、行こうか」
とても重要な言葉を、とても重要とは思えない口調で言った上官に、部下の騎士達は不快感の欠片もない視線を向けた。

後世の歴史書には、この部下達の反応についても記述されている。戦闘を目前に控えていても緊張感に苛まれない、強靭な神経の持ち主である騎士隊長自身に忠誠を誓う者も、少なくはなかった。戦地で兵士と同じように自分の命を危険に晒し、沈着な計算のもとに決断できる指揮官が部下達に慕われなかった事実はない、と。

……騎士達の視線に応えるように、ヘルムートは手綱を引くと同時に、クレイモアを鞘から抜き、夕空に切っ先を向ける。夕陽を背景に映えるその姿を見た者は、戦慄が背筋を駆け抜けるのを実感した。

そして、美貌に似合わぬ低い声が騎士達に出陣の命令を下した……。

2 迫撃戦

秋の憂いに染まった空は、アランドラ軍とルシタニア軍の壮絶な地上戦を見つめている。そこでは、弱体部に帝国軍が全兵力を叩きつけて戦線を突破したために、同盟国軍は大混乱に陥っているのだ。強行突破に成功した帝国軍は、戦場に急行しつつある騎士団第一陣との合流を目指し、組織的な反撃と後退を繰り返していた。

「槍兵隊、反転！」

第三軍司令官ベンジャミン・ペリーズ將軍の最後尾への指示による、組織的な反撃のはじまりだった。

「騎兵隊、離脱しろ。槍兵隊、攻撃！」

いい判断だ。一心不乱の人間には、必ず隙が生じる。上官の左隣を駆けている、第三軍の参謀ロイズ・フランシスは心の中で呟いた。司令官の抽象的な指令を、騎兵隊長は即座に理解した。彼の指揮の下、中列に控えていた一二〇〇の騎兵隊は本隊両翼に部隊を展開し、敵軍の右側面に斬り込んでいった。一〇分足らずで同盟国軍の長蛇陣は前後に分断され、圧倒的に少なくなった九二騎の騎兵からなる前衛部隊は、帝国軍槍隊の強攻で全滅した。

同盟国軍兵士の死屍で道が舗装されたため、追撃の速度も、決して満足できるものではない。ある者は死体につまづき、ある者はごく少数ではあったが 武器を握りしめたままの死体に突っ込み、死せる仲間の刃に身体を貫かれた。

「そろそろ諦めてくれんかな」

多くの敵を死に至らしめる作戦の実行命令を下した張本人は呟く。無駄な犠牲を避けることこそが彼の主義であり、用兵の基本であった。

「生還した騎兵には、例外なく恩賞を約束しよう。程度の差こそあれ、臆病風に吹かれた者にもな」

彼は言う。臆病風に吹かれた者がいても、責任の一端はそれを処

断しなかつた指揮官に帰する。失態の明らかな部下の処断も、指揮官の役目である、と。

同盟国軍の混乱は拡大し、帝国軍は今以上に後退の足をはやめた。

しかし翌々日の早朝、帝国軍の伝令が吉凶両報をもたらした。「増援、両軍ともに到着！」

帝国騎士団の本拠地は、同盟国増援軍ほど戦場から離れていたわけではなかつたが、農民兵や補給部隊も連れた騎士団にとって、これは急いだ結果であつただらう。

敵軍の増援には、味方に多少の恐慌が生じたが、第五軍司令官代理ナルセスの品性を欠く叱咤がそれを打破した。

「野郎、何を慌ててやがる！ 我々の任務は逃げることであつて、真正面から戦うことではない！ 敵増援は遙か後方、更に、兵が増えれば足並みが乱れるのは用兵の定石。よく考えてみる、我々は優位に立つたのだぞ！」

彼の言つたことが事実か否かは、四時間後に明らかになった。その時、同盟国軍は増援の再編に手間取り、帝国騎士団の急襲を受けたのだつた。

先陣をきつて敵陣に突撃したのは、獅子のような容貌に気障な笑みを浮かべた“百人斬りの勇者”ヴェイル・ジュリアスだつた。二本の槍を両脇に挟み、それぞれ片手で握っている。

丸太のような両腕が一振りされると、鋭い音を立てた槍の矛先が、彼を挟み込んでいた同盟国軍兵士の鎧と兜の間隙を正確に捉えた。その数秒後には、宙を舞つた左手の槍が獲物の頭を貫いていた。

兵士の命を三人を死神に売りつけ、鎧に犠牲者の数を刻むという、陳腐だが威圧的な行為は実を結んだ。鎧の横三列を埋めるおびただしい数の傷を見た三名の同盟国兵士は、彼に背を向けて逃げ出した。しかし、敵前逃亡を潔しとしないジュリアスの偏見と勝者の権利

により、彼らも背後から突き倒されてしまった。

時を同じくして、ヘルムート・アンゲルス子爵率いる第二陣は、指揮官の独断で迂回路を驀進していた。この行為が戦闘後に処罰の対象とされる可能性もあるが、彼としては戦闘の早期終結を優先したかったのだ。

「一気に戦力を投入したことにより、補給線の負担は明らかに重くなる。餓死するのはたまらん」

独断に対して慎重論を唱えた部下に彼は言った。

敵軍の左側面に到達すると、騎兵隊の急襲で警戒を強めた兵士達が、組織的な反撃に乗り出した。ヘルムート騎士隊の参戦によって完成した、ゆるやかな半包围陣形は次第に収縮していく。

「これをどう思う？」

騎士隊中央部に退いたヘルムートは、隣で血を拭いている腹心に訊ねた。

「追撃戦に入って、敵は後方の警戒を怠っておりますな。補給線を叩く、良い機会かも知れません」

ナダルの言葉に左眉をつり上げ、ヘルムートは唇を歪ませた。

「じゃあ、略奪つてのは悪いことだと思うか？」

「それは……時と場合によりますな」

不意に無表情を崩したナダル。

「今は、絶好の機会でしょう」

その言葉に、ヘルムートの唇は更に歪んだ。

私より後方に控えた部隊は戦線を離脱せよ、という単純な指示で、騎士隊の後尾部隊と騎士隊長自身は戦線から離脱し、同盟国軍の後方で孤立している補給部隊に急襲をかけた。追撃に入った同盟国軍にとって、敵軍の後方奇襲は想定外のものだった。

「補給物資を欲しいままに奪え！」

荷物を抱えて逃げ惑う補給兵をランスで突き倒すと、ヘルムート自身は、ナダルに重要な指示を出した。

後続の補給部隊が全滅したとの報告が同盟国軍司令官タニア・ロム將軍のもとに届いたのは、襲撃開始から三時間後であった。

「貴殿は、この戦況をどう見る？」

失策に動じた様子もなく、ロム將軍は参謀ヨハネ・ハルデスに訊ねた。

「これ以上の犠牲を避けるためにも、撤退すべきかと」

あえて常識論を提示した老練な参謀。

「やはり、それしかないか。」

俺としたことが、こんなくだらない失策に身を委ねるとはな」

自嘲するように呟き、

「それにしても、奴らには達観した指揮官がいるようだな」と続けた。

その達観した指揮官は、少数兵力をもって、いまだ同盟国軍の背後を脅かしている。

「まずいな、退路を断たれるぞ。全軍を急いで退却させろ」

猛々しい司令官の声に、参列者で反論した者がいた。部隊長バリである。

「しかし閣下、敵軍は度重なる追撃に疲弊し、こちらが全力で弱体部の一カ所に攻撃を加えれば敗走するでしょう。その後に返し刃で敵軍別働隊を葬るべきです」

「そんなことをしている間に、我が軍の疲労と飢餓は目も当てられぬ状況になる」

ハルデスの落ち着いた声が、彼の意見を否定した。不満そうな視線を投げかけながらも、自分の非を認めざるをえないようだった。

「閣下、我が隊だけで偵察を行わせて頂きたいのだが」

部隊長の勝手な発言に、赤みがかった髪を揺らして参謀が反発した。

「自重せよ。そんな行動を許可できるわけが」

「いや、やらせてやれ」

ロムの反応はハルデスと違うものだった。参謀は驚きに目を見張り、反論の手段さえ見出せないでいた。

そんなことはいざ知らず、彼は続ける。

「部隊長、貴殿に敵別働隊の動向偵察を命じる。機会さえあれば、撃滅するもよし」

バリーが感謝の意を込めた敬礼でそれに応えると、司令官は頷きを返した。

その場を部下が去ると、ハルデスはやっと疑問を口に出した。

「何かお考えがあたりで？」

「あのような男は、私の幕下に必要ない。司令官の命令に不当な異を唱えるような猪突児はな。敵の手で始末してもらおうじゃないか」
冷酷な笑みを浮かべて、將軍は呟いた。

こうして、“戦術部隊指揮官としては有能だが、戦略知識に欠ける部隊長”は、ヘルムート騎士隊に名目上の偵察隊指揮官として差し向けられることになった……

3 陥穽

敵の退路周辺に陣を張ったヘルムート・アンゲルスは、敵少数部隊接近の報を受けると部隊を移動させた。

敵部隊から逃げるように戦場を騎兵隊は駆け回り、数分後に敵本隊の接近を知ると、今度は急速反転に及んだ。

緩やかな弧を描いたヘルムート隊は、その機動力に対応しきれなかった同盟国軍偵察隊の側面に矛先を向けた。騎士達の雄叫びと馬の足音が地を揺るがし、敵兵を戦慄の淵に叩き落とす。ヘルムートは槍を振りかざし、敵兵を馬から突き落とした。一回転した槍は鞍に掛けられ、長剣が見せ場を迎えた。キシヨウと名乗る豪傑を相手に数合打ち合うをするも、なかなか勝敗は決せず、お互いに兵士の群れに身を潜めた。

「この状況下で、何をしようというのです？ 戦火を交えても、ほとんどもは逃げているではありませんか」

ヘルムートと併走している、西国の戦闘部族出身の勇士ユーリが、浅黒い顔をしかめて言った。

「まあ見ておけ。あれを使うんだよ」

ヘルムートは足元の草地を指し示した。そして、彼は辺りを見回し、数秒後に大声を上げた。

「全隊に合図を！」

ヘルムートが指示を出すと、騎兵隊が横列に展開し、薄く広い陣形で反撃を開始した。

騎士隊長自身が放った火矢を合図に、近距離に控えていた弓騎兵隊も火矢を二本ずつ弓の弦にかけ、それを放った。やがて、穂先から根本にかけて炎に包まれた矢が、広大な草原に等間隔で墜落した瞬間、地獄の業火は同盟国軍本隊を包囲した。

偵察隊を敗走に追い込んだヘルムートが、剣を鞘におさめて声を張り上げた。

「貴殿らの勇戦に敬意を表す。この上に残された道は、虜囚たることを受け入れ生を全うすか、燃え盛る業火に吞まれるか、それだけだ。もし、前者を受け入れるつもりであれば、火炎の壁に活路を開き包囲網を敷いてある。諸君が武器を捨てて投降を選ぶのなら、我が軍は人道に基づいて諸君を迎えるであろう」

ヘルムートは、戦争自体が人道に反する行為であることに皮肉を覚えながら、敵軍に呼びかけていた。

やがて、名目上の降伏勧告、事実上の脅迫は功を喫した。

その時、同盟国軍将兵にとって、心地良いはずの風は死神の息吹でしかなかった。自らを撫でつける風の体感温度は、上がるばかりである。

熱風に煽られながらも、兵士達は言葉と視線を交わし合った。

「おい、どうする？」

「部隊長の首でも手土産に降伏しようか」

「火炎を越えて、栄誉ある戦死を遂げよう。誰か、私に水をくれ！」

「いつそ、敵の戦力に組み入れてもらってもいいだろう」

そんな中に、一人だけ冷静な判断を下す部将がいた。

「俺は閣下の指示を待つ。部下を大事にしてくれる將軍だからこそ、今まで命を投げ出してきた。このまま無為に死を待つのも悪くないが、あの方はそんな意味のない死を選ばないだろう」

その言葉を裏付けるように、部将のもとへ伝令が駆けつけてきた。「司令官閣下から伝令！」

“我が軍は、今日をもってアランドラ同盟国軍から白旗集団と成り下がる。武器を捨て、速やかに降伏せよ。自害または挺身突撃、その他殺傷行為は命令として一切禁ずる。しばし神に授かりし身を休め、来るべき解放と再戦の時に備えるべし”

以上

部将は短めの赤髪を撫でながらため息をつき、部下に命じた。

「聞いている通りだ。我が軍は武器を放棄、全面的に降伏を受け入れる。お前らの命は、この私、ウェイン・ロムに与えられた全権の許

す限り保護に努めよう」

彼の言葉を聞き終えると、狂喜した兵士達は武装を解除し、不安げに炎の壁を抜けていった。それを見送った赤髪の部将は、まるでピクニックにでも行くような調子で呟いた。

「さて、司令官のところにも行つてくるか。

……勇敢な『銀翼の戦神』^{マルス}の言葉に甘えるために」

本陣では、参謀ハルデスや多くの情報統制官が慌ただしく命令文書や作戦文書の焼却に励んでいるようだった。その中をのんびりと歩く赤髪の部将に気づいている者はほとんどいない。

「タニア・ロム將軍」

聞き慣れた声に、將軍は振り返ることなく呟いた。

「……見事にやられたよ、ウェイン。私の戦争は、ここで終わりのようだ」

ややあつて、ロムの弟は口を開いた。

「そんなことはありません。今は虜囚となる他ないでしょうが、必ず味方が助けに来るでしょう」

「しかし、それは何ヶ月も先の話だな。我が軍はこの戦いに一万三〇〇〇余、敵軍も同等かそれ以上の兵力を投じたんだ、しばらくは侵攻らしい侵攻はしないだろう」

帝国軍の全兵力は二二〇万、同盟国軍は一九〇万。双方にまとまった兵力があるとしても、それを動かすに不可欠な兵站は、今回の負担が重なって悲鳴を上げる。

「だからこそ、気長に休暇でも楽しむ気分で待ちましよう、兄者」
拷問やら死刑やらが待ち受けているかもしれないが、とウェインは心の中で呟いた。

こうして、エトルランドの戦いは幕を閉じた。この戦闘での活躍が著しいヘルムートとジュリアスには、それぞれ兵権の拡大と特別給与が約束され、国内外にその名を知らしめた。

部将ウエイン・ロムの「銀翼のマルス」という言葉は、いつしかヘルムート・アングルスの名となっていたのだった。

ルシタニア帝国軍参戦兵力：一万五八〇〇。戦死・行方不明者六〇〇〇余。負傷者三五七一。第五軍司令官ラウル將軍、戦死。

アランドラ同盟国軍参戦兵力：一万三五〇〇。戦死・行方不明者九〇〇〇余、負傷者二〇六九。全軍降伏、壊滅。

4 冬の来訪者

エトルランド草原での大規模な戦闘が終結してから三ヶ月が経過した。ルシタニア帝国領では、降り注ぐ雪が冬の到来を告げる頃である。動物は寝静まり、大都市の喧騒は鳴りをひそめ、人々や動物の声が鼓膜を刺激することはほとんどなくなっていた。

ペルガモン城内では、参謀会議を終えて、二日の休暇を得たヘルムート・アンゲルスが部屋を出てゆつくりと歩いていた。彼は鎖帷子^{チェーンメイル}以外には何も防具を身につけていない。彼の肉体は数週間^{チェーンメイル}に及ぶ戦いの日々に疲労してはいたが、チェーンメイルを通して視覚できるほどに筋骨の逞しさを誇っていた。

青白い輝きを放つ雪を乗せた木造建築が主体の壮観。その中に美しい貴公子があるために、それは美観に変化するのであった。

「人は少ないか」

しかし、冬景色に染まった帝都を散策するために外へでている者は皆無に等しかった。逆に巨大な暖炉の温もりに身を委ねた城内が賑やかさを増したため、ヘルムートの神経は参ってしまったのだが。

そこに、馬に乗って歩いてくる小柄な人影があった。長めの白いローブに身を包み、それよりも白々とした手でしたっきりと手綱を握っていた。

「あの……」

近づいてきたその人物は、遠慮がちに尋ねてきた。

「ペルガモン城は、正面に見えるあのお城でしょうか？」

「そうです。この地、帝都アッバースに、城は一つしかないのです」

異国の方だろうか、ヘルムートは思った。一つの街に複数の城があるという話は、大陸の中央に位置する大国デイスメルド・マーチ連合の『^{ウチェルド・ブレグアートル・ブルク}猛禽の三連城』以外に聞いたことがなかったのだ。

「そうですか、よかったです……」

よくよく聞いてみると、その声は

「ああ……えっと、お嬢さん？」

どう首をひねるうとも、出てきた結論は『女の声』だった。彼は気まずそうに、その少女に話しかける。

「はい」

透き通るような声が、彼の鼓膜を撫で回した。

「お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

彼がそういうと、少女は顔を赤らめた。

「あつ……自己紹介がまだでしたわね。」

わたしはデイスメルド・マーチ連合のシャロン・アポロニア・ハートベイカーと申します」

フードを外したシャロン・アポロニア・ハートベイカーの髪は、陽光を反射してやわらかに輝くクリーム色であった。

少女の言葉を聞いて、若き騎士の目は見開かれ、畏怖するような色はその美貌に浮かんだ。

「これは失礼を、お嬢さん。ところで貴女、ハートベイカー大将の父をご存知ですか？」

彼の言葉を遮ったシャロンは、不思議そうに首を傾げた。

「同じ道を歩む者の中に、貴女の父上を知らぬ者はおりません」

彼は笑顔の裏で、記憶の人名図書館から『「謀将」プブリウス・ロビニウス・ハートベイカー』という書物を手繰り寄せていた。

二六年前、デイスメルド・マーチ連合最大の内戦『東北戦役』では、ハートベイカー率いる反乱勢力が手勢二〇〇〇の軍で敵兵糧庫を襲撃、六〇〇〇の本陣防衛隊を兵糧攻めによる混乱で無力化し、敵将と内応して右翼部隊五〇〇〇を併合、左翼部隊の指揮官を暗殺した後、正面から戦いを挑んだ二五〇〇の陽動隊で敵陣中央を強行突破、本陣を混戦に巻き込み総大将ハメルを捕縛、倍以上の敵軍を敗走させた……。

謀将の名をほしいままにするような男の娘が、なぜこんなところに……？

その疑問は胸中にねじ込み、口からは違う言葉が出た。

「どういった用件ですか？」

「それ」から手を離して頂けるのでしたら、お答えしますわ」

少女は、若い騎士の腰に提げられているものを指差して言った。

「それとも、身元のわからぬ少女の全てにその礼儀でお応えするの
が、この国のルールですか、騎士殿？」

「……これは失礼を致しました、お嬢さん」

目を瞬いた“騎士殿”は剣の柄から手を離し、そして付け足した。

「しかし、あまり得策とはいえませんよ」

「軽々しく父の名を口にすべきではありませんものね」

少女の翡翠色の瞳に、一抹の影が降りたように見えた。気まずい
雰囲気振り払うように、彼は話題を戻す。

「ええ。それで、用件というのは？」

「……両国の友好と通商安定に関わる重要書類を携えております」
本当なら、この若く美しい騎士に教える必要はなかった。だが、
少女としては抽象的であっても内容を教えておけば、彼が門扉を開
くよう口添えしてくれて、本来よりも早く城門をくぐれるという計
算があった。

その後、彼が取った行動を見る限り、功を喫したようだった。

この人の好い騎士について行き、難なく王城敷地内に入った瞬間、
彼女は絶句した。

あらゆる美辞麗句を並べるに値する外観。かといって、城塞とし
ての機能が損なわれていないわけではない。

淡い陽光を受けて鈍い輝きを放つ鉛製投げ槍・投擲用岩石・弩が
城壁に備えられ、壁自体には横に細長い穴があり、それが攻城兵器
破砕機の発射孔となっているようだった。

人体に悪影響を与え、鉄製・木製に比べ重量に優れることが鉛製
投げ槍採用のきっかけである、と少女は父から聞いたことがあった。
「素晴らしいでしょう」

シャロンの“可憐な美しさ”のある顔を視界の端に捉えながら、

ヘルムートはいった。彼の視線も巨大な城に注がれている。

「ええ。籠城戦闘に特化していながら、優美さも損なわれてはいない……」

ヘルムートは目を見開いた。

「ほう……」

「この城の美点をも見抜くとは、さすが」
先程の自分の言葉を思い出し、彼は少女の面白がるような微笑に怯んだ。

しばらく歩みを進めていると、大きな門が見えてきた。門前には二人、武装した兵士の姿があった。

「すまないが、このお嬢さんを通してやってもらえないか」

ヘルムートが問いかけると、年配の兵士から、彼自身がいったのと同じ言葉が返ってきた。

「どのようなご用件で？」

彼は衛兵に近づき、用件を耳打ちした。

「彼女は、デイスメルド・マーチ連合の特使だ」

「こんな少女が……本当にありますか、閣下？」

年配の兵士は、驚きを隠しきれないといった表情で小柄な少女に目を向けた。

「信じがたい話だがな。しかし、陛下に取り次ぐ前に文書も徹底的に検証される。この少女にもその察しはつくだろう。」

あえて来たからには、恐れは不必要であり、偽りはなきに等しいと思わないか？」

若い騎士の言葉に、その先入観を逆手に取った策謀ではないのかと兵士は思ったが、これ以上反論しても機嫌を損ねるだけだと感じ、城門を開けるよう指示した。

「お待たせしました、お嬢さん」

ヘルムートがそういうと、デイスメルド・マーチの若い特使は春の日差しのような笑顔を向けた。

「ありがとうございます。」

あと二人でいる時、わたしのことは名前でお呼びになって」

「わかりました、シャロン……様？」

少女の翡翠色の瞳を覗きこむ。

「二人きりの時は、呼び捨てで構いませんわ」

可憐な微笑がそれを迎えた。嘘偽りのない笑顔は人を幸せにするというが……このことだろうか、と若き騎士は考えた。

シャロンと共に、ヘルムートも客間に案内された。そして、彼らをこの部屋に案内した使用人はゆっくりと頭を下げた。

「ご苦労様です」

友好中立国であつても、決して味方の地ではない場所に深く入り込んでいるのに、使用人に対するその言葉からシャロンの緊張感は全く伝わってこない。この少女は無神経なのかとも思ったが、“鈍くさい”というわけではなさそうだった。

シャロンがためらいがちに口を開いた。

「あの、城外に護衛の兵を三〇名ほど待たせているので、彼らに休憩所か何かを設けていただければありがたいのですけれど……」

「それは一大事です。すぐに用意させます」

ヘルムートは急ぎ足で扉を開き、客室を守る三人の衛兵に話を通した。

一人の衛兵は大急ぎで廊下を走り、近場の宿屋との交渉に向かった。問者に間違えられてはたまらない、と呟いて。

「ありがとうございます」

少女はゆっくりと頭を下げ、上げるとヘルムートを直視した。

「……楽しいお散歩を中断させてしまったようですわね」

困ったような表情をしながら彼女は続けた。

ヘルムートは笑顔で応じる。

「この分の時間外手当と振り替え休日が支給されますので、ご安心

を

「まあ」

二人の若者の笑い声が室内に響く。

「……それにしても、その若さで『閣下』と呼ばれるなんて、よほど優秀な騎士様ですね」

シャロンが感心したように言った。

「いやいや、ほとんどが祖父の七光りです」

「ふふ、そんな謙遜する必要はありませんわ。あなたは有名人ですもの。」

エトルランドの英雄さん

彼は少女の微笑に一瞬だけ見惚れたが、読みとられぬうちに表情を切り替え、苦笑しながら口を開いた。

「そのように言われているのですか」

「ええ、若く美しい騎士隊長が戦局を急進展させた」と

彼が応えようとした時、扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

シャロンは明るい声で言った。

「失礼します。ハートベイカー様、皇帝陛下が面会を許可なされ、準備が整いました。こちらへ……」

部屋に入って恭しく礼をした使用人は、シャロンの手を取って近づいてきたヘルムートに紙を渡し、彼女を外に招いた。

一礼をして使用人が去ると、ヘルムートはその紙に目を通す。

《イスアル騎士団騎士隊長ヘルムート・アンゲルス子爵に勅命である。》

面会が終わるまでに武装した騎兵一〇〇を召集し、それをもってハートベイカー令嬢の護衛を貴殿の最優先任務とし、直属の護衛兵と協力して令嬢をデイスメルド・マーチ領内まで無事に送り届けよ。苦笑した彼は『勅書』に向かって呟く。

「私の休暇は……？」

彼の意志をもひねり潰せるだけの権力を持ったそれは、無論、何

ヘルムート戦記

も答えなかった。

5 出立

ナダルに勅命の概要を伝えると、ヘルムートはペルガモン城内の自室に戻って、重武装に身を固めながら独語した。

「彼女を送るとなれば、故郷あそこを通るな」

帝都からデイスメルド・マーチ連合領を目指すには、『ロゼッタ』という地方を通過するのが常道だった。それは彼の祖父イアドランが統治を委任された地でもある。聡明で美しい姉リディアが警備軍副司令官と憲兵隊司令官を兼ね、柔和で沈着な兄ロビンが領主補佐を任されている。

「リディアとロビンが逆の性で生まれれば……」

というのが祖父の評価である。リディアには貴族社交界の体面もあつたし、ロビンには逞しく育ってほしかったのだろう。孫二人の反撃については明らかに不満足だが、リディアからは怒号、ロビンからは無言の苦情が届いたとヘルムートは見ている。

……ヘルムートが意識を水面下から引き戻すと、自分と呼ぶ小さな声が聞こえてきた。

「……アンゲルス卿」

ヘルムートの自室を守る警備兵だった。

「どうした？」

「閣下の弟を名乗る青年が二人、お見えになっていますが」

「ふむ……」

彼は双子の弟のことを即座に思い出し、警備兵に指示を与えた。

「武装を解いた状態で通してくれ」

ヘルムートの弟を名乗る二人は、彼の前に非武装で姿を現した。
「お久しぶりです、兄上。リヒャルトと弟のオスカーでございます。」

此度、我ら兄弟は兄上の護衛を最優先任務するよう、お祖父様から仰せ仕りました」

双子の兄がギクシャクした口調で言うと、ヘルムートは冷たく言い返した。

「お前達兄弟の顔なら、一目でわかる。

……で、何のための護衛だ？」

声の高低差以外は聞き分けのつかない兄弟は、兄の心に立ち込める憤激の暗雲に気がついた。

「……ええと、兄上の身を案じて」

銀髪の兄がクレイモアに手を伸ばす光景が、オスカーの言葉を途切れさせた。

「あのご老体が私の身を案じるとしたら、もっと早く手を回していただはずだ。

……ナダルか誰かの差し金だろう。違うか？」

「ご明察の通りです」

そう答えながら、冷たい汗が背筋を伝っていることを、リヒャルトは自覚した。末弟のオスカーは“面倒な問答”の全てを兄に任せられているようだった。

「では、残りの話は“お節介な副官”に訊くとしてよう。

……お前達も準備を整えておけ。すぐに出立する」

威圧感を含んだ上官の言葉に、双子の護衛兵は従うしかなかった。

「やっぱり、兄さんは貴族の面目を保とうとしている気がするよ」
オスカーは静かに言った。

「ああ、俺らが貴族の子弟なのに騎士叙勲をしないで、傭兵隊に志願したからだろう」

欠伸をしながら、リヒャルトは同意した。

「やっぱり、傭兵は評判が悪いんだなあ」

「当たり前だろ。“あの事件”の傷痕は、そう簡単に癒えるもんじやないさ」

答えながら、双子の兄は思いを巡らせた。

あの事件……“大乱の闇夜”と呼ばれた、傭兵隊による大量虐殺と大強姦事件。先帝ヴァンダレイ三世の三女（皇帝ルーファウスの妹）も犠牲になったと言われている。

オスカーはゆっくりと歩き出した。戦争と殺人と強姦は、人間の歴史の中で絶えることのない三大悲劇だ、と呟いて。

少しずつ太陽が顔を見せ始めた頃、その控えめな陽光に照らされた少女の姿は、一輪の冬薔薇を思わせた。

彼女の側にゆっくりと近寄る者があった。紫色の奇妙な甲冑を身につけ、歪曲した剣を腰に提げている。

「信頼できるお方ですわ」

無言で直立する護衛隊長に、少女は半ば独語するように言った。

「かといって、全面的な信頼は置くわけにはいきません、シャロン様。今でこそ盟友と呼べますが、この国はかつての敵国ですから……」

返答した男の表情は、口だけが動いているように感じられるほど硬かった。

「少なくとも、騎士殿は信頼に値するお人柄でしたわ。そうでしょう、ジェクス少佐？」

「あの方は確かにそうでしょう。ですがやはり、油断はなりませんぞ」

矛盾したことを深刻な顔で言うと、

「心得ております」

シャロンは、厚手のローブの下に納められた四本の短刀を腹心の男に見せた。その顔は不敵な笑みに満たされている。

「心配ありませんとも」

繰り返す言うと、不敵な笑みを奇怪な微笑みに変えた。そして、少女はゆっくりと背を向けて歩き出す。

彼女が父親から受け継いだものは、未恐ろしい資質だったのかもしれない、とジエクスは後に語った。

重武装した騎士団の一隊が、正規軍帝都警護部隊から“異国の姫君”以下三〇名の護衛兵を引き受けたのは、それから間もなくのことであった。

「身命に代えましても、貴女をお守り致します」

銀髪の若者は、護衛対象たる少女に安心させるつもりで声をかけ、護衛隊長ジエクス少佐と無言で握手を交わした。

円陣で護衛対象を囲みつつ、ゆっくりとした足取りで進む騎士隊に、ある凶報がもたらされた。

「“ウイヴァーゼン”一個小隊が接近しつつあり」

騎士達の表情は驚愕と恐怖に歪んだ。

「ウイヴァーゼン……？」

シャロン姫は、おっとりとした口調で語尾に疑問符をつけた。

「非合法的に組織された私兵集団の総称です。大貴族による個人創設が主な発信源で、法的保護は得られず、任務と共に略奪・暴行を

「

「つまり、捕虜になって殺されても文句は言えず、武装だけはいっちょ前の略奪集団ってことです」

ヘルムートの護衛として控えていたオスカー・アングルスの手を、ヘルムートが簡略化して遮った。

「まあ……大丈夫ですか？」

口ほどには驚いた様子もない少女は、遠くの略奪集団を眺めた。「略奪される前に与えてしまえば良いのです」

「……というと？」

「実演を御覧あれ」

ヘルムートは小さく笑い、四騎の配下を引き連れて馬を走らせた。「ウイヴァーゼンの大将に告ぐ、私はルシタニア帝国軍イズアル騎士団のヘルムート・アンゲルス子爵だ」

自分の名を振りかざすことに抵抗がなかったとは言えなかったが、彼は任務優先の軍律を守ることにしたのだ。

「人質にしようとするのではないか」

身辺でシャロンを守るナダルは呟いたが、彼女はそれに同調しなかった。彼の鬼神の如き活躍は、国内であれば、情報網に疎い貧困層ですら知るところであったから、ウイヴァーゼンのような無法者も迂闊に手出しはできないと思われるのだった。

「貴殿らの大将と話がしたい。大将は私と同数の配下を従え、こちらに来て頂きたい」

しばしの沈黙の後、数十人の無法者の中で比較的背の低い栗毛の男が前に進み出た。毛皮のコートを羽織っていて確認はできないが、武器は所持していないようだった。

「俺達に喧嘩をふっかけてきた、今までの坊ちゃん方とは格が違う奴のようだな」

尊大に男は言うつと、一人で騎士達に近づいてきた。ヘルムートは、目配せして配下の騎士を下がらせた。

「貴殿らと争う気はない。事を穏便に進めたいのでな」

ヘルムートが馬を降り、男を見下す形で対峙した瞬間、二人を隔てる空間の一部が輝いた。

「よく止めたものだ」

「……“暗器”か」

ヘルムートが目を移すと、逆手に握られた長剣とコートの袖から取り出された小刀が競り合い、小刻みに震えていた。

状況の急展を交渉の決裂と見なしたナダルらであったが、剣戟を交わした両者が武器を収めたことを遠目で確認すると、安堵の溜め息を吐いて今度こそ静観を決め込んだ。

やがて、交渉は首尾良く進んだようで、騎士達の若き上官は“五体満足”で戻って来た。

「戦場では命令伝達の苦勞、平時では軍令の苦勞、任務では上官の苦勞があるものだ」

とは、この時のナダルの心情であったが、口から流れ出した言葉は少し違っていた。

「子爵、今少し自重をお願い申し上げます」

「……ああいう奴らは、頭目同士が話し合ったり討ち合ったりすることを己の美学にしているのだな」

笑顔で答えたヘルムートから謝罪や反省の言葉はない。

「ですが」

「もう良いでしょうか？」

ナダルを一瞥し、シャロンはゆっくりと遮った。

「子爵様が無事なら、何も問題はありませぬわ」

ナダルは無言で頷き、少女の正しさを認めた。

「それにしても、お金の力というのは……」

騎士隊が広大な荒野を歩き始めると、シャロンは呟いた。

「恐ろしいものですか？」

「いいえ、美女の色香よりも魅力的な武器ですわ」

ヘルムートの質問というより好奇心に笑顔で答えたが、相手の表情の激変に顔を赤らめ、俯いてしまった。

上目遣いでゆっくり見返すと、女性に似合わぬ冗談は言わない方が無難ですぞ、と言いたげな表情は消え失せていた。

「私は“色香派”ですよ」
という、片足が一線を超えた耳打ちと引きつった笑顔がシャロンを迎えたのだった。彼女の幼げな顔の向きが、また地面に固定されたことは言うまでもない。

美しい特使に対する言葉が“冗談”であったのか、“本心”であったのかが判明するのは、もっと先のことであった。

果てしない空の下、若い騎士の物語は始まったばかりであった…

6 姉弟対面

ウイヴァーゼンとの遭遇以後、ヘルムート一行は何事もなく前進し、帝都出立から一週間が経過していた。ロゼッタ最大の軍事拠点『バルム城塞』の門をくぐると、戦場さながらの重装備に身を固めた傭兵達が目についた。城内では、貿易商やら武器商やらが忙しく走り回り、軍需物資を補充している。

しばらく城内の待合室で待たされた後、部屋に入ってきたのは、この城の警備責任者だった。彼はヴェイエリと名乗り、ヘルムート達に客室を貸し与えてくれた。

「客室……ねえ」

釈然としない表情でリヒャルトが呟いた。

「あまり清潔な部屋は期待できないね」

「全くだ」

オスカーの言葉に頷くと、彼は近くでヘルムートと談笑しているシャロンに目を向けた。

「可憐で綺麗な“お姫さん”だこと。それに」

含みのある口調で呟くと、ローブを脱いで薄着になった少女の胸元に視線が落ちた。

「こっちも、余裕で合格」

兄の独語がオスカーには届いていたため、その鍛え抜かれた拳が、瞬時に兄の顔面を捉えたことは言うまでもない。

「これだけの騎士を連れて行くのは難儀ではありませんか？」

双子が不毛な争いを始めた頃、ヘルムートとシャロンは、談笑から真面目な話題に移っていた。

「ロゼッタ領内を出てからは帝国軍国境防衛団の護衛を手配してあります。なので、彼らのほとんどはこの地で任務完了となり、最前線にある我が隊の本拠地まで直接向かうことになります」

「では、食糧の心配はありませんのね」

「無論です」

このような問答をしながら、ヘルムートは驚きを禁じ得ない。この“異国の姫君”は、軍事学に関する事柄をあれこれと彼に訊ねてくるのだ。それも、根幹たる戦略理論を踏まえた上で、確認するかのように。

無論、高名な將軍である父親の影響はあるだろうが、“深窓の姫君”を具現化したように美しく可憐な愛娘に、血生臭い行為の細部まで教えようとするとは思えなかったのだ。これは論理面よりも感情面の反発に属する考えであつたが、こういつた先入観があると容易には見つからない答えが自ら彼の前に現れた。

「このような理論って、面白いですわ」

同時に、ヘルムートの両目が見開かれた。しかし、その反応はシヤロンの発言に対する確信ではなく、扉を開けた長身の人物の姿をシヤロンの肩越しに認めたからであつた。

「姉さん？」

ヘルムートが静かに口走つた言葉に、シヤロンはゆっくりと振り向いた。

青年騎士の姉は、弟に向けて、

「やあ、ヘリー」

と声をかけたきり、クリーム色の髪の少女に視線を転じていた。

「あなたがシヤロンね。私はこの城の城主リディアよ。よろしく」

弟とは対照的なリディアの言動に、少女は内心たじろいだ。優雅な動作で、差し出された手を握つた。

「シヤロン・アポロニア・ハートベイカーです。こちらこそ、よろしくお願ひしますわ」

型通りの社交辞令が済むと、すぐにヘルムートは姉の私室に招かれ、今後の日程が話し合われた。

「あなたの部下九五名は、一一名を残して本拠地に戻ることになる。それはわかっているね？」

リディアは、目の前の弟と同じ色の瞳を煌めかせた。

「ええ」

「あなたに命令を発した上官が、補給を軽視する人物なのか、大軍なら安全だと思い込んでいる精神構造なのかは知らないけど、これだけの護衛を連れて、よく餓死しなかつたわね」

「無能で鳴らす軍務次官が編制しましたから、数も物資も破天荒なのです」

弟は苦笑して応じた。

「困った次官殿ね。」

とにかく、国境の防衛隊と合流するまで少数の兵で頑張ってもらうよ。それと、通行許可証を明日までに用意するから、アルピアス街道を通るといい。あそこはリグリアの傭兵隊が確実な“害虫駆除”を行っているし、ほかの道を使うよりも早く国境に到着できるから」

東方の自治区リグリア辺境領出身の傭兵は、過不足なく仕事をこなすことで有名であった。そのため、ルシタニア帝国では、勅選傭兵隊の三分の一がリグリア人部隊で構成されている。

「では、その道を使わせて頂きましょう。私は四〇名の護衛と一人の特使を連れて、明日にでも発ちます」

弟の答えに頷き、リディアは自ら戸を開けて、

「また会おう、ヘリー」

やはり男っぱい口調で言った。

その日の夜、ヘルムートは用意された質素な服に着替えて、割り当てられた部屋で赤ワインを手に取った。

寝椅子に身を委ね、ゆっくりと今後の行程を見直す。

「アルピアス街道まで半日、街道を抜けるまでに三日……」

一息おいて、

「予定の二週間より早く着きそうだな」

と彼は呟いた。

旅の疲れを癒すため、あちこち見て回るのも良いかもしれない。いずれ、再び戦いに身を投じる時がやってくるのだから、これくらいの息抜きは許されても良いはずだった。

彼が思考の駒をのんびり進めていると、誰かが部屋の扉を遠慮がちに叩く音が聞こえた。

「どうした？」

「ジエクス殿がお見えです」

「構わない、通してくれ」

筋骨隆々の異邦人は、足音も立てずに部屋に入ってきた。丁寧に一礼すると、左手に握った酒瓶をぎこちなく差し出した。

「我が国の流儀です。本国産の安ワインですが……一杯、いかがですか？」

「……良いだろう」

ヘルムートは唇の両端を僅かに吊り上げた。彼は、この客人に対して言葉遣いを変えるつもりはないようだった。

無言で酒を酌み交わすことが三往復に達した頃、若い騎士の方から沈黙を破った。

「そういえば、以前からハートベイカー將軍はどういったお方なのかお聞きしたかったのだが……」

英雄に対するヘルムートの興味がそう言わせたようだった。

「一言で言えば、とても質素なお方です。愛娘たるお嬢様にもそれだけは徹底させておりました。そのため、貴族に異端児の如く扱われ、政治家からも冷淡な目で見られているようでした」

「英雄というのはそんなものだ。能力的に優れた者であるが故に、理解者に恵まれることは少ない。人によっては、英雄を英雄と認めることもできず、見下すこともあるのだろう。逆を言えば、一部の英雄は、理解者に恵まれたからこそ認められたとも言えるが、実際はほとんどいない。あのゼフィオン大帝ですらそうだった」

ヘルムートはつくづく思うのだった。過去の歴史において、強大な才能に対する嫉妬と羨望の夫婦は、必ず危機感という名の子供を

生んできた。そして、英雄という名の宝石は、近くで見ると眩し過ぎ、素手で掴むには熱過ぎた。嫉妬と羨望の子供は、時に失明で理性を失い、時に火傷に憤怒して、あらゆる宝石を溝の中に捨て去る。その多くが自分の責任であり、自分の生存に必要な存在であることも忘れて……。

「古来、戦場に倒れる名将はほとんどおりませぬ。私には、名将の名将たる所以はそこにあると思われませんがな。」

指揮官には、戦に勝つことだけでなく、戦場に倒れることなく部下に対する責任を全うすることにもあるのですから」

ジェクスは、そう言いながらグラスにワインを注いだ。

「戦に勝ち、部下を生き残らせ、自らも生き残って、任務を終えるまで部下を統率する。ハートベーカー將軍はそれをできる方なんだろうな」

「左様です」

壮年の少佐が頷くと、銀髪の騎士は小さな笑みを浮かべて言った。「謀将という言葉だけで括れる方ではないな。一度、將軍のもとで戦ってみたいものだ」

再び時が静かに踊り始めると、二人の勇者は微笑を交わして、同時にグラスを空けた。

毛布を華奢な身体に巻きつけて、シャロンはバルコニーに佇んでいた。空から降り注ぐ蒼い光が彼女の透き通るような肌を艶かしく彩り、より一層その存在を儂げに見せている。

「あの方に会ってもらいたいものですわ、お父様」

正面に広がる街並みを見つめ、この遙か先で大軍を率いているはずの父親に囁いた。

それっきり、彼女が言葉を発しなかった。ゆっくりと背伸びをして、夜空に輝く星々に両手を伸ばし、優しく包み込んだ。

翌朝、四一名の勇士は準備が整い次第、ヘルムートを先頭に出発することになった。見送りに来たのは、リディアと三名の護衛兵だった。

「あれ、警備責任者のおっさんは？」

リヒャルトが弟に訊ねた。彼は“おっさん”の名前はすでに忘れていた。

「さあな。用事でもあるんだろう」

オスカーは肩をすくめて辺りを見回した。

「兄さんは？」

リヒャルトは、門の前に立っている兄に人差し指を向ける。

「あそこで“楽しいお話”さ」

彼らの兄は、“楽しい”というには深刻過ぎる顔でジエクスと話していた。

「行程は昨日の夜に説明した通りだ。護衛部隊の配置は先日と同じで、前衛に私の部隊、後衛に貴殿の部隊、決して前後離れることのないようお願いしたい」

「お嬢様の場所は……」

「後衛の中央だ」

「承知しました。私は部隊に戻らせて頂きます」

ジエクスが歩み去ると、今度はリディアがヘルムートに話しかけた。

「大変ですか。美しく愛らしい姫君を守る時だけは、副官に一切を任せずに自分でやるのは」

「ナダルには部隊から抜けた騎士達をまとめてヴェスヴィオ砦に送り返すという任務がありますから」

ヘルムートは、表情一つ変えずに応じた。

「……それだけか？」

「否定していませんが」

リディアは鼻を鳴らし、きつく弟を抱きしめた。背は彼女の方が

低いため、遠目からでは恋人同士の抱擁に見えなくもない。

「気をつけな」

「言われるまでもありません。というか、やめてくださいよ」

「相変わらず、可愛げのない弟だな、お前は」

彼女は弟を解放してやった。

「……誰に似たんでしょね」

顔を背けて、可愛げのない弟は呟き、続けた。

「じゃあ、またしばらくお別れです」

彼は馬に飛び乗り、自分と同じくリディアに呼び止められた双子の弟が何事かを囁かれて抱きしめられているのを見つめていた。

「出発だ。目指すはルシタニア・ディスマルド・マーチ国境地帯。

そこには警備隊の連中が待っているそうだ。お姫様を送り届けたお礼として、ここらでは見られないものを食わせてもらえるかもしれないぞ！」

双子が帰ってきたのを確認したヘルムートが声を上げると、騎士達は雄叫びで応じ、ゆっくりと歩き出した騎士隊長について行く。

三人の弟達は、それぞれのタイミングで遠ざかる姉に一度だけ振り向いた。

7 北方の雪国

「国境警備隊か、あれは？」

オスカーは地平線を凝視しながら呟く。彼の視線の彼方には、黒い影が横一面に広がっている。それは止まっているようだった。

「だとしたら、ずいぶん多いな」

先頭を進むヘルムートが静かに応じた。

「警戒しているのですか？」

リヒャルトが問いかける。

「この辺りの治安は抜群と姉上に聞いたから、賊ではないだろう。

だが、用心するに越したことはない。今回は戦闘員だけではないのだから」

兄の返答に、双子は顔を見合わせて苦笑した。

結局、オスカーの疑問は正しく報われ、先程の影は国境警備隊であつた。

ヘルムート一行が、互いの容貌が確認できるほど集団に接近すると、身なりの立派な青年騎士が馬から降りて、大声を上げる。

「私はブランド・マーカス・ハーラン中将、国境警備軍の総司令官です。アンゲルス閣下率いる騎士隊とシャロン姫の一行をお迎えに上がりました」

訛のある帝国公用語だった。近づくにつれて、その顔に赤い刺青が目周囲から下顎にかけて彫られていることに気づいた。

「警備軍？」

首を傾げながら馬から飛び降り、ヘルムートが訊き返した。

「失礼。訳し方に差があるのを忘れていました。我が国では、警備軍と呼称するのです」

「なるほど。こちらこそ、いらぬことをお訊きしました。

“国境警備軍”の協力に感謝します。首都までの案内をお願いします」

ヘルムートは頭を下げて、手を差し出した。両者は握手を交わり、視線を交錯させた。

「貴殿が世にも名高い防戦巧者、ですな？」

突然、ヘルムートが切り出す。

「……左様です。この刺青を見て、人は私を“赤い壁”と呼びますがな」

少し自己満足に浸るように、中將は顔の赤い刺青を指でなぞった。

「この大きな声は誰かと思えば……あなたでしたのね」

おっとりとした女性の声が、その場にいる全員を振り向かせた。

シャロン姫が隊列の先頭まで進み出てきたのだった。

「お嬢、お迎えに上がりました」

“赤い壁”は嬉しそうに微笑んだ。

「頼りにしてるわ」

他の護衛達の“お嬢様”とか“姫様”とかいう言い方とは違う、とヘルムートは思った。二人が浅からぬ関係であることは確実だろう。

「アンゲルス卿、ここから先は緊張感を緩めても問題はありませんわ」

シャロンは微笑んで言った。

「“赤い壁”の力は、戦闘以外にも発揮されていますから」

四倍以上に増加した護衛部隊は、護衛対象の重要性を語るものであった。そして、皇帝ルーファウスとの会談の内容についても同様である。その内容について、ヘルムートが知ることは当分なかったが……

五〇〇近い部隊が北上するにつれて、雪は馬が拗ねたように歩みを止めるほど深くなってきた。寒さにより衝撃への痛みが増しているため、馬に鞭を打つわけにもいかず、行軍速度は急激に落ちた。

「首都まで、あと何日くらいかかるか、わかりますかな？」

ヘルムートが訊ねた。

「いや、もうそろそろ、三連城が見えてきてもおかしくはありません」

ハーラン中将は苦笑するように答えた。視線はヘルムートの背後に注がれている。

「寒い」

リヒャルトがヘルムートの背後でわめいていた。兜に収まりきっていない眉毛と前髪は凍りついている。

「寒い、寒い、寒い」

「うるさい！」

オスカーが怒鳴ると、リヒャルトは一瞬で静まった。

「急いの方がよろしいですな」

ハーランは、ゆっくりとヘルムートに視線を転じた。

「お願いします」

ヘルムートは、整った眉毛にこびりついた霜を落としながら答えた。

この国の寒さは、ルシタニア帝国より北にある分、帝国領内のそれとは比べものにならなかった。帝国領内ならば、国境地帯まで行っても、日向に出れば多少の暖かさは感じられるのだが、連合領内では身体にまわりついた雪が輝くだけに終わるのだった。

とはいえ、ヘルムート一行は、すでに首都領域内に入っていたため、強烈な寒さからは少しずつ解放され、猛禽の三連城は視界を占領するまで近づいていた。

デイスメルド・マーチは、血縁関係のある三人の年老いた国王と四五人の議員で構成された元老会議が政治的中核を成す、大陸北西部を支配している立憲君主制の連合国家だった。そして、六〇万以上の陸上戦力を備えた軍事大国でもある。

外交関係では、大陸南西部のルシタニア帝国、大陸北中央部のマラネロス商業自由国と軍事同盟を結んでいる。逆に大陸南中央部の

アランドラ同盟国、大陸南東部のコルマール民主共和国、サン＝ナセル自由国とは、国家体制の面から対立関係にあり、それはルシタニア帝国の対外関係と全く同じである。

首都のカラブリアは、何らかの温暖化措置が取られているのか、比較的暖かく、リヒャルトがわめくこともなくなった。

「なんと、まあ……」

ヘルムートは巨大な三つの城を見上げ、そう言うしかなかった。

「偉大な”城”ですな」

ナダルは簡潔に感想を述べた。

全ての城が雪の色に染まっているため、配色や城ならではの“美”に個性は見られないが、その大きさは“偉大”と称するにふさわしいものであることは間違いない。

「久々の故郷ですね」

ジェクスは、シャロンに囁くように言った。

「ええ、お父様は元気かしら」

少女はゆっくりと白い空を見上げる。

「元気でいらっしやるでしょう。失礼ながら、お父上は色んな意味で破天荒なお方ですから」

「フエエ、クシヨッソ！」

デイスメルド・マーチ連合の軍司令官のみが所有を許される大きな執務室。洗練された容姿に似合わぬプブリウス・ロビニウス・ハートベイカー大将の豪快な“くしゃみ”は、上階で掃除をしていた侍女が飛び上がるほど大きなものだった。

「誰だ、俺の噂をしてる奴あ？」

誰もいない部屋の中で、ハートベイカーはペンを回しながら呟くと、また事務に戻った。謀将と呼ぶには無理のある優しそうな顔に、“真剣”の文字が貼りついているかのようにだった。

軍事予算の割り振り、戦略部隊の編制、諜報活動、武器の生産・開発、平常・非常物資の調達、大規模演習の日程など、一軍の司令官の任務は多忙を極めた。中小規模の演習や訓練、戦術部隊の編制は“下の連中”に任せておけば何とかなるが、戦争の最重要課題は自ら解決しなくてはならない。それは軍規ではないのだが、彼はいつもそうしている。

とはいえ、彼の専門は諜報活動や内部工作なので、それ以外は全面的な指導にあたっていない。

「ダリウス軍務官を呼んでくれ」

ハートベイカーは警備兵に命じた。

僅かな時間を隔てて部屋に入ってきた軍務官は、少壮気鋭にはほど遠い無気力そうな男だった。大抵の民間人は、彼が軍関係者だと知って驚くが、意外にも思い切ったことのできるこの男には、ハートベイカーも信頼を寄せている。

「御用でしょうか」

「用もなく呼ぶほど、俺はひねくれてはいないぞ。

……編制案をお前に任せたい。最近は何事もなく平和続きだが、それが突如として終幕を迎えることもある。だから、非常事態に即応できるような部隊を二個師団用意しておいてくれ。俺からの注文はそれだけだ」

「では、“急襲部隊”から頂きましょうか」

軍務官の言葉に、ハートベイカーは目をパチクリさせた。

「奴らでは、少々危な過ぎないか？」

文字通り、急襲攻撃を専門とする特殊部隊だが、その扱いにくさはハートベイカーも辟易するほどのものだ。反逆・反乱行為、度重なる戦場外乱闘行為、半狂乱的戦闘行為……

「いえ、危ないからこそ選ぶのです。彼らも自国が存亡の危機となるような事態になれば、きちっと動くでしょうし、敵もあの戦いぶりでは――」

ダリウスが言いかけた時、突如として一人の警備兵が執務室の扉

を開け、直立不動の姿勢を取って敬礼した。

「会議中、失礼します、閣下」

「どうした？」

突然に入ってきた警備兵に向かって、ハートベイカーは促した。

「ご令嬢が、無事、首都にご到着なさいました」

「やっと着いたか」

父親は手元の紅茶を飲んで一息吐くと、

「迎えに行こう」

と言った。

ヘルムートは、前方から迫る威風堂々とした男に目を留めた。長身ではないが逞しい体格で、腕はゆったりとした冬着の上からでも筋肉質であることがわかった。唇の端を僅かにつり上げた顔は、悪っぽい中年貴族を思わせる。左の腰には裸の短剣が二本、右の腰には鞘に収まっている長剣が一本、差されている。

「貴殿は？」

ヘルムートは身構えたが、ジエクスが彼の隣に歩み寄り、無言でその腕を押さえた。

それを見た悪っぽい中年貴族風の男は、ゆっくりとした口調で答える。

「デイスメルド・マーチ連合第二軍司令官ハートベイカー大将。：

…ご存知かな？」

若い騎士は、慌てて馬から飛び降り、

「これは失礼を」

と言って跪いた。彼の頬を冷たい汗が伝う。一国の要人が護衛も連れずにいるのだ、驚かないわけにはいかなかった。

「お初にお目にかかります。護衛隊長ヘルムート・アンゲルス子爵です」

「ほう、お前がああ……」

いや、話は後にしよう。我が国は諸君を歓迎する。せっかく来た

のだから、しばらくこの国を見て回るといい。

……ジエクスもご苦労だったな」

ハートベイカーがそう言うと、ルシタニア帝国の騎士達は歓声を上げた。ヘルムートとジエクスは飾り気のない笑顔を浮かべる。

それを嬉しそうに見つめたハートベイカーは、視線をあちこち移して回った。

「ああ、私事を持ち込んで悪いんだが、シャロンはどこにいるのかね？」

そう訊いた瞬間、俊敏な動作でクリーム色の長い髪の少女がハートベイカーに飛びついてきた。

「お父様！」

「おお、シャロン！ ご苦労だったな。少しは社会勉強になったか？」

ハートベイカーは、笑いながら娘を見下ろした。

「ええ、もちろんですわ。異国には素晴らしい“殿方”もおりましたし」

急に、シャロン姫は冷ややかになった。

「何？」

父親の表情も一変する。少しの間、視線が泳ぎ、横で跪く一人の人物を見据えた。

「……この若い美人の騎士殿か？」

「それ以外にいますか？」

冷酷の域に達した少女の視線は父親から離れ、“若い美人の騎士殿”に注がれた。

「ヘルムート・アンゲルス卿、面を上げなさい」

「はっ！」

顔を上げた“若い美人の騎士殿”の目に飛び込んできたのは、意図的に左目を閉じた少女の顔だった。若い騎士は、突然の“ウインク”に驚き、心の中で狼狽する。

「全く……」

ハートベイカーは呆れたように眩き、ヘルムートの後ろで立ち尽くす將軍に目を向けた。

「ブランド」

「……はっ」

「お前も一緒に来たらどうだ？」

「い、い、いえ、私には任務があるので」

ハーラン中將は、顔を刺青と同じ色にして答えた。

「国境警備軍は忙しいことだな。わかった、職務に戻れ。」

「……さ、城内に案内しよう。積もる話もあるだろうからな」

悪戯っぽく笑ったハートベイカーは、異国の客人を連れて、真ん中の城に向かった。幹部だけに城内の案内をするため、騎士達は客人室に押し込められ、シャロンは自宅に戻っていた。現在はヘルムート、ナダル、リヒャルト、オスカー、ハートベイカーの五人しかいない。

護衛隊の大部分がハーランとシャロンの関係について、共通の疑問を持っていた。その中に、疑問を口に出した人物がいる。

「……兄上」

リヒャルトは兄に近づいて囁いた。

「何だ？」

ヘルムートの無表情な返事があった。

「もしかして、シャロン姫って……」

城内の廊下では、リヒャルトの声はヒソヒソとしか聞こえない。

「ハーラン中將と“深い関係”があるのでは？」

「そうかも知れないな」

兄は無表情のままだった。何を考えているかわからないというより、何も考えていないような感じだ。

「でも確実に、兄上に気がある」

オスカーが割って入る。ヘルムートの表情が微妙に変化した。

「やっぱ、そう思う？」

「ああ、だって」

「ここから先が“王の間”だ」

ハートベイカーの声に、兄をつつき回していた双子は黙り込んだ。「とはいえ、三人の国王陛下はそれぞれの城で職務に励んでおられるため、今回はお目通しできない」

突然、ヘルムートは心の中である推測がよぎった。王の間まで一騎士隊長を案内するというのは、全面的な信頼の証なのではなからうか。そうすると、二国の間柄は更に近づいたことになる。ということは、あの美しく愛らしい特使の持ち込んだ書簡は……
「隊長？」

気がつくと、ナダルが覗き込んでいた。ハートベイカー大将と双子の弟はもう歩き始めている。

「いや、行こう」

ヘルムートは小声で言っつて、ゆっくりと歩き出した。

ハートベイカーは突然振り返って、

「あ、そうだった。一つ言い忘れていたよ。君達も城の中に押し込められているだけではつまらないだろうから、後でシャロンの案内で街を散策してみてもどうかね？」

と提案した。

「それは是非、お願いしたいですね」

ヘルムートは微笑んで答えた。

……見渡す限りの雪景色の中、諜報員のもたらした情報がデイスメルド・マーチ連合を震撼させた。

【コルマール民主共和国の第七軍がアランドラ同盟国領を経由して、デイスメルド・マーチ連合領を目指している】

コルマールの第七軍。それは、たった半月で大陸北東部のタマルカンド帝国を滅ぼした“神速の女将軍”クララ・ハツキネンが指揮する精鋭部隊であった……

8 因縁

ヘルムート一行が到着した翌日。シャロンの案内の下、ヘルムート、リヒャルト、オスカー、ナダルの四人とルシタニア人の護衛兵五人は街中に出歩いていた。ジェクスは護衛の任務を終え、しばしの休暇をもらっていた。

「ここが、我が国で最も大きい公園“クライスト・マルク”になります」

シャロンが可憐な笑みを浮かべて紹介すると……

「ほええ！」

リヒャルトが目前に建つ像を見上げて、感嘆の声を上げた。

「広い公園にも驚きを禁じえないです。でも、それより驚いたのは、このデカい像 “リドリー” という人物ですよ。誰です、この人？」

この彼の質問に答えたのはシャロンではなく、ナダルだった。

「この方はリドリー元帥だったと思う。確か、この国の最高軍事指導者として、数十年に渡ってデイスメルド・マーチを守ってきたお方だ。その軍事的手腕といったら、ゼフィオン大帝に勝るとも劣らないと言われているが、性格面に問題があると聞いている」

「あら、博識ですね」

シャロンはキョトンとした表情で呟いた。

「……実は私、この国の出身でしてな」

「え?!」

ナダルが無表情で言うと、ヘルムートは、珍しく驚愕の表情を見せて訊ねる。

「お前、ルシタニアの出ではなかったのか？」

「出身はデイスメルド・マーチです。今まで話したことはなかったので、驚いて当然でしょうな。私は閣下の副官として働く以前、閣下が幼少の頃から“お世話”をさせて頂いてましたが、必要以上に

素性を明かす必要はないと思っていました」

「確かに、私の“世話”をするために必要なことではないが……」

ヘルムートは口をつぐんだ。いつも簡潔で面白みのないやり取りを好むナダルに、ここまで驚かされるとは、彼は思っていなかったのだ。

「申し訳ありません」

ナダルは頭を下げた。

「謝るほどのことではないでしょう。そういえば、わたしの母も外国人だったのですよ」

シャロンが呟くように言った。

「ほう」

と、ヘルムート。

「ええ。わたしが生まれて間もなく父と離縁してしまったため、わたし自身に母の記憶はないのですが、母の記憶はコルマル民主共和国の貴族だったと聞いておりますわ」

「国境を越えた愛。素晴らしいね」

リヒャルトが茶化すように言うと、今回はいつもと違い、ヘルムートとオスカーもそれに頷いた。いつもはツツコミ役のヘルムートやオスカーも同じ思いだったのだ。

「……ところで、シャロン様。案内の続きをお願いしても？」

ヘルムートがシャロンを見つめる。

「話し過ぎましたわね。もちろんですわ」

彼女は笑顔で答えた。

ヘルムート一行がシャロンに案内されていた日の軍議では、デイスメルド・マーチ連合軍の中核を成す将軍達が参席していた。最高司令官リドリー元帥、副司令官ハートベイカー大将、遊撃機動軍司令官フレドアンス中将、国境警備軍司令官ハーラン中将、義勇軍司

令官クレス少将である。

「コルマル軍を防ぐための作戦は、まだ立案されていない。各々の“知”を駆使して作戦を組み立ててもらいたく思う」

話を切り出したのは、リドリー元帥だった。“昔は名の知れた戦士だった”というより、“昔は優秀な参謀だった”と言うべきこの老人は、穏やかそうな白髪白眉に加え、軍人とは思えない優しい輝きを瞳に宿した人物だった。しかし、内実は見かけによらず、苛烈で容赦のない人物として知られている。

「まずは私から言わせてもらいましょうか」

そう言って立ち上がったのは、柔軟な思考力と優れた守備力に定評のあるハーラン中将だった。元帥が頷くのを見てから、逞しい胸を反らせて一息つき、彼は説き始めた。

「基本的な戦略としては、正面からの戦いは避けるべきかと。敵軍の指揮官は、女性と言えど大陸切つての勇将であり知将です。まともにもふつかつても少数なら少数なりの、多数なら多数なりの方法で我が軍を翻弄し、撃破していくでしょう」

「……必ずそうなるとは限らない。こちらは“雪山育ち”で、あちらは“海岸育ち”だ」

静かに反論したのは、フレドアンス中将だった。自ら率いる“鉄騎団”によって、敵軍を短時間で粉碎する攻勢型戦術を得意とするため“猛将”と呼ばれている男だが、見かけからはそのあだ名に結びつかない。中肉中背の体つき、端麗な容貌、寡黙だが度胸を備えた男だった。

年上だが同格の將軍に対して、ハーランが頭を振って答える。

「だからといって、油断はできません。確かに、こちらには地の利があり、この地方での戦い方も熟知しています。」

しかし、今回の侵略にはコルマルの他にアランドラも絡んでいると考えられており、我が軍との戦いに慣れたあの国によって、こちらの戦略や戦術が漏洩していると考えて良いでしょう。正面からぶつかって犠牲者が増える前に、敵軍の疲労を誘発すべきでは？」

ハートベイカー大将は、ハーランの言葉に同調して頷き、立ち上がった。

「その通りだ、ハーラン中将。情報は物資に次ぐ戦略上の要点、敵の手が我らの国土に及ぶ前に民衆を後方へ避難させ、焦土作戦を実施すべきだろう」

「なるほど……しかし、戦争が終わって国内を再建するには、多大な時間がかかるのではないでしょうか？」

フレドアンスが、ハートベイカーに向かって訊ねると、

「……ほっほっほ」

リドリ―元帥の笑い声が会議室に響いた。

「きつとな、国内の再建をする前に人手が足りなくなるであろうよ。戦争が起きれば、農民は死ななくても兵士は死ぬ。兵士が死ねば農民は徴兵され、農民の人数は減る。」

簡単な引き算よのう」

元帥が言い終えた直後に立ち上がったのは、義勇軍司令官クレス少将だった。長身で逞しい身体つきの少将は、守勢からの一転反撃を得意とし、“ここぞ”といった時の機動力には目を見張るものがあった。しかし、瞬間的な攻撃が終わってしまうと、義勇軍という立場上、兵力も訓練も満足できるものではなく、いち早く後方に戻す必要性が生じる。

「私が農民の出であることは周知の通りですが、故に農民の気持ちもあなた方よりはわかっていっているつもりです。」

きつと、彼らの中には土地を離れたがらない者がいるでしょう、

我が軍にも敵軍にも抵抗する者もいるでしょう。

これに対する処置はどうかさるのです？」

裂けたような大きい目を見開いて、クレス少将は老いた將軍に視線を叩きつけた。

「……我々の国は民主共和国ではないのだよ」

最高司令官の返答には、無表情で聞いていたハーランとフレドアンスも表情を変える。ハートベイカーだけは無表情を貫いていた。

「民を強制的に疎開させようと言うのですな。しかし、民なくして国家は成り立たちませんぞ」

むろん、そう言ったのはクレスだった。

「それはわかっておる、少将。しかし、反抗するであろう民を含めた多くの人命を救うために必要な措置なのだ。」

戦争が終わって、まだこの国が生き長らえていたとすれば、私は軍部の専門家達の中から、優れた農業管理者を選び出し、軍の人的資源を各農家のために割くことを約束しても良い」

リドリーは、厳しい口調で提案した。

「……なるほど、かしこまりました」

一見、クレス少将は引き下がったようにも見えたが、彼はこの提案の矛盾に気づいていた。国家の防衛に成功しても、強敵を相手にしたため軍事力は疲弊する。そうになると、軍が兵士を各農家のために割くなど考えられなかった。

「わかっていると思うが、勝手な行動はならんぞ」

ハートベイカーがクレスを睨みつける。

「私も武人である以上、いつまでも軍部の方針に異論を差し挟んでいるつもりはありません。しかし……」

農民出身の将軍は、立ったまま言いよどんだ。握り拳が小刻みに震えている。

「しかし？」

じれったそうに、フレドアンズが先を促す。

「その任を果たすために、私を遣わして頂くわけには参りませぬか？ これは自論を諦めるための条件ではなく、単なる請願として受け止めてもらいたい」

それを聞いたリドリー元帥は、しばらく思索する顔を作り、やがて口を開いた。

「……認めよう。しかし身の安全のため、貴殿には四〇〇の精兵を与えようと思うのだが？」

身の安全のため、という言葉がクレスの頭の中で反響した。恐ら

くは、お目付役といったところなのだろう。
「謹んで承る」

畏まったようにクレスは言い、やっと席に腰を下ろした。それを確認すると、リドリーは諸将を見渡した。

「さて、更に深く進んだ作戦案についてだが、我が軍は焦土作戦によつて敵軍の補給線に打撃を与えることでよろしいかね？」

誰も異論を唱えることはなかった。しかし、賛成の声がなかったのも確かである。

「では、これで決定とする。」

参謀長との協議の結果、各軍の兵力数は次のようになった」

リドリー元帥は、兵力数の書き込まれた大きな紙を壁に貼り出した。

リドリー＝ハートベイカー統合軍：リドリー元帥以下……三万、

ハートベイカー大将以下……二万

国境警備軍：ハーラン中将以下……四万

遊撃機動軍：フレドアンス中将以下……二万五〇〇〇

義勇軍：クレス少将以下……二万

合計：一三万五〇〇〇

「なお、部隊配置などの子細については、休憩を挟んでから説明するものとする。一時解散」

全員が立ち上がり、最敬礼の後に休憩に入るため、部屋を出て行くこととした。

「ハートベイカー將軍」

ハートベイカーを呼び止めたのは、リドリー元帥だった。彼はゆつくりと部下に近づき、耳打ちした。

「貴殿の“苦しみ”はわかる。が、今は戦時中。私情は捨てよ」

その言葉に、ハートベイカーは無言で頷き、部屋を出て行った。

三連城の貴賓室で、ヘルムートは、ゆっくりと目を開いた。朝の日差しが自分の胸の辺りに降り注いでいる。寝ぼけ眼でベッドから這い出すと、着替えることもなく寝っぴいでいたことに気づいた。「ん？」

誰かが部屋の扉を叩いている。そんなに大きな音ではなかったが、寝起きの人間にとっては不愉快極まりない。

「誰だ？」

扉を叩く音よりも大きな声で、彼は問いかけた。

「ナダルです。着替えが終わったら、食事の用意が来ておりますので、第二食堂までお越し下さい。部屋の前に案内の侍女がおります故、彼女の後についていけばたどり着きますので」

「……朝食か？ わかった」

着替えを終えて、部屋の外に出てみると、白衣のような上着に身を包んだ、気の強そうな黒髪の少女が待っていた。

「お初にお目にかかります、アンゲルス卿。わたくし、侍女のシエラ・ダフネ・フレドアンズと申します。今日より母国へご帰還の日まで、子爵閣下の身の回りの世話をさせて頂く者でございます」

黒髪の少女はスカートの裾をつまんで綺麗に一礼し、廊下を歩き出した。

「第二食堂までご案内致しますので、わたくしの後についてきて下さいませ」

フレドアンズ……どこかで聞いたような、とヘルムートは、彼女の後についていきながら思案を巡らせたが、ヘルムートがディスマルド・マーチの猛将フレドアンズに思い当たることは無論のこと、少女がフレドアンズ將軍の従妹にあたることなど知るはずもなかつ

た。

「一〇〇メートルも歩かないうちに、少女は余裕をもって扉の前で立ち止まった。」

「こちらが第二食堂になります。わたくしはアンゲルス卿の後ろに控えておりますので、何かございましたらお呼びくださいませ」

扉が自動で開いて 恐らく食堂の中に扉の開閉を担当する者がいたのだろう、ヘルムートは近くに直立している料理人らしき中年の男に挨拶をして、空いている席についた。扉の横に控えていたナダルも、ヘルムートの背後を守るようにして席につく。

「お、兄上のお出ましか」

そう声を上げたのは、無論、リヒャルトだった。

「化け物が出たみたいと言っなよ」

そう応じたのは、無論、オスカーだった。

「兄上は一種の化け物さ。女にモテてしょうがない」

「本人はいつも迷惑そうだけど」

双子の弟は兄よりも先に席を陣取っており、下品とは言わないまでも、決して上品とは言えないぐったりとした姿勢で座っていた。

「声が高い」

ナダルがたしなめた。

「はっはっは」

料理に唾が飛ばないように注意しながらも高らかな笑い声を上げたのは、料理人らしき中年の男だった。

「これは失礼。仲の良いご兄弟で羨ましい限りですな。」

申し遅れましたが、私はこのお城で料理長を勤めさせて頂いているガスパルという者です。私には姓名の区別がないので、ガスパルとだけお呼びください」

ガスパルと名乗った男は、太鼓腹を揺らして言ったかと思えば、さっさと言葉を継いだ。

「今日の朝食は、我が国の伝統的なパン料理『バツカス』になっております。こんがり焼いた食パンは、赤ワインにつけてヴァヴァ

ガロを少々かけて頂ければ、より美味しく召し上がることができま
すよ。ヴァヴァガロは、見た目こそ七味唐辛子に似たり寄つたりの
我が国特有の調味料ですが、意外にもアルコール類に合った甘みを
持っています」

彼が話し終わつた瞬間には、すでにリヒャルトとオスカーは、ヴ
アヴァガロをかけたワインづけのパンを口の中に放り込んでいた。
目の前の長テーブルにはワインの飛沫が僅かに飛び散っている。

「こりゃ美味だね」

「全くだよ」

双子は頷き合いながら、次から次へとパンを口に放り込んだ。

「おい……」

ヘルムートが怒りを露にして言った。

「あ、ごめんなさい。傭兵生活が長かつたもんで、こんなちゃんと
した食事は久しぶりなんです。あまりに美味そうでつい……」

とオスカーは言ったが、手はパンを握つたままだつた。

「いや、私の話が過ぎました。それに、お褒め頂けるとは嬉しい限
りですよ。ベーコンとソーセージ、目玉焼きも一緒にどうぞ。た
だ、ハートベイカー閣下が来るはずなので、もう少しお待ち頂き
かつたのですが……」

ガスパルは笑顔を崩すことなく、何気なく言おうとしたちょうど
その時。

「遅れて申し訳ない」

突然、扉を開けて入ってきたのは、礼服姿のハートベイカー大将
だつた。

「お食事を一緒にさせて頂こうと思ひましてな。失礼するよ」

よくテーブルを見回してみれば、ヘルムートの正面の席が空いた
ままだつた。

「閣下、お時間はよろしいので？」

ガスパルが不安そうな表情を見せた。

「ああ、言つまでもなかつた」

「これは失礼を。」

では皆様、ごゆっくりどうぞ」

ガスパルは食客全員に一礼して、厨房に戻っていった。食べ始めてから数刻が経過した頃。

「ところで、アンゲルス卿」

ハートベイカー將軍は唐突に言った。

「は……」

「そんな畏まらなくても良い。

先日軍議で、我が国はコルマル第七軍の軍事侵攻が確認された。そのため、貴殿の母国　ルシタニア帝国への経済援助を要請することになったんだが……」

「ほう、女將軍が攻めて来たのですか。」

ところで、今度は私が使者となれ、ということでもよろしいのでしょうか？」

ヘルムートは、ハートベイカーの意図するところを正確に読み取った。

「あ、いや、失礼。しかし、そう聞こえたものでして。つい口が動いてしまいました」

「気にすることはない。その通りだからな。」

ということで、重要文書を貴殿にお渡しするため、本日の正午に使いの者がそちらの部屋を訪れる。その時間帯は、できるだけ部屋に留まってもらいたい」

「承知しました」

とヘルムートは言って、断りもせず食べ始めた。

「……面白い青年だ、貴殿は」

バツカスを口に運びながら、ハートベイカーは呟いた。リヒャルトとオスカーが神妙そうな顔で聞き耳を立てている。

「どこがですか？」

「そうだな……アレクサンドル大王の面影がある、とでも言うっておこうか」

その言葉に、ヘルムートはバツカスを喉に詰まらせて苦しみ出した。

「がっ……アレクサンドル大王、ですか？」

「ご存知ないかな。」

彼は、我が国で最も有名な名将の一人として知られている。先々代の国王の七番目の弟にあたる人物で、王族でありながら戦術家として優れた手腕を発揮し、大陸暦三九六年に亡くなるまで、四〇の戦いを勝利に導いたと言われている。後に政界へ転じ、有能ではないにしても堅実な行政能力には定評があり、大陸暦三九四年に我が国の統合案を提示したという」

この話を聞き終わった時、ヘルムートには、ナダルが好奇心よりも嫌悪感を露にしていたことが印象に残っていた。彼がここまで感情を面に出すのは珍しいことだったが、敢えてそれを訊く気にはならず、ヘルムートはそれを記憶の隅に押しやってしまった。

しかし、“因縁”というものが本当に存在するのならば、彼はナダルが嫌悪感を露にした理由を訊くべきだったのである……

9 出征

二月一五日の夜。他家の令嬢達との食事会を終えたシャロンは、散らかったままで出ていった自室に戻った。

「出征前ですのに、お父上のもとへ行かなくてもよろしいのですか？」

絹のドレスや分厚い本が散乱している部屋を片づけ、暖炉に薪を放り込みながら、侍女が遠慮がちに訊ねた。

「きつと、お父様には出兵の日に会えると思うわ」

シャロンは静かに答えて、身振りで侍女に下がるよう命じた。

彼女は、侍女が出ていったのを見計らって、着替えるために上衣を脱ぎ捨てて裸になったもの。良家の令嬢は、一人で着替えをするには許されていない。寒さが身体を包み込もうとしてきた。

「……寒い」

そう呟くと、彼女は上衣を羽織り、暖炉に向かって歩き出したが、誰かが部屋の扉を軽く叩く音が聞こえてきたため、立ち止まった。

「どなた？」

「シャリー、父さんだよ。開けておくれ」

紛れもなく父の声だった。二人で話す時だけ使う愛称で呼びかけているため、父が一人であることを彼女は予想した。急いで下着を身につけ、父を部屋に招き入れた。父のもとへ行くのを遠慮したというのに、まさか自分から来るとは思わなかった。

「軍備の方は良いのですか？ 副司令官というのは、部隊の編制やら運用やらで大忙しかと思っていましたわ」

シャロンは驚いたような表情で言った。

「ああ、大丈夫だ。少し時間ができたものでな」

ハートベイカーは笑顔で答える。

「少し、お前に訊きたいことがあるんだがね」

すぐに、父の顔から優しい笑顔が消えた。

「……何ですか？」

シャロンは表情を変えず、後に続く言葉を促した。

「お前は……こんな短い付き合いの中で、あの騎士隊長殿に想いを寄せるようになったのか？」

美しく可憐な少女の驚いた表情は、ますます深みを増した。

「え、いえ、そんな……」

父の目に映る愛娘の姿は、否定しようかしまいか、悩んでいるようだった。

「……好きかどうか、自分でもわかりませんの。でも、強く惹きつけられていることは、なんとなく感じていますわ」

その言葉に嘘がないことを見抜くと、ハートベイカーは口を開いた。

「そうか。変なことを訊いて悪かった」

父の言葉に、シャロンは無言で首を傾げる。父親は恥ずかしそうに微笑し、

「じゃあな」

と言つて、娘の疑問に応えることなく部屋を出ていった。

「……それだけが訊きたかったの？」

やがて、シャロンは一人で呟いた。

二月。

酷寒の地で、七万の軍を率いている一人の女性がいた。

コルマル民主共和国のデイスメルド・マーチ侵攻軍司令官クララ・ハッキネンである。

波打つクリーム色の長髪、小柄だが優美で敏捷そうな身体、知性と自信に満ち溢れた笑顔を持つ、成熟した美女だったが、実年齢は不詳で、公式記録にも二〇年以上昔の軍歴は残っていないという、謎多き女性司令官であった。兵士達の間では、目尻に小さく刻まれたシワや手の質感など肉体的な特徴から五〇歳前後と思われる。

アランドラ同盟国の支援の下、コルマール軍は、デイスメルド・マーチ連合とアランドラ同盟国の国境地帯に大規模な宿営地を建設した。

それは寒い中でもある程度の暖が取れる小さな街となっている。宿営地とはいえ、敵襲の可能性は極めて少ないことから見張り台は設置されておらず、警備にあたる兵も少ない。現在、偵察部隊の指揮官から報告を受けている司令官が寝泊まりする幕舎も、三人の兵士によって入口を警備されているだけであった。

「失礼します、ハツキネン司令官。偵察状況の報告に参りました」
そう言ったのは、偵察部隊の指揮官エミール・リュティだった。全体的に細長い印象を受ける彼の身体は、神経質な彼の性格を反映していた。独創性よりも正確性に優れた思考力は、偵察任務にうつてつけの人材だった。

上官が頷くのを確認すると、明瞭な言葉で報告し始めた。

「捕らえた使者を尋問したところ、偵察隊が掴んだ情報の通り、敵の総大将はリドリー元帥で間違いありません。彼は、指揮官としてよりも策謀家として名の知れた男。戦術面より戦略面に注意を払うべきでしょう」

「……言われなくてもわかるわ。敵軍の指揮官には私の“よく知る人物”もいることだし、少しも油断をするつもりはないわよ。

それと、使者には乱暴をせぬよう伝えておいて」

コルマール第七軍司令官クララ・ハツキネンは憎々しげに答えた。苛立ちを隠しきれないとでも言うように、机の端を指先でつつている。

「承知いたしました。

しかし、妙なこともありまして……」

リュティが呟くと、ハツキネンは綺麗に整えた眉を上げて訊ねる。

「……何？」

「冬場の国境地帯だけあって、敵の大部隊がないのは珍しくはありませんが、敵地に入り込んだ部下達は、敵の警備軍だけでなく、村

々に農民の姿さえも見かけなかったと言っているのです」

「それを先に言って欲しかったわね」

「申し訳ありません。これは、何かの策略だと思われませんが……」

「策略？」

女将軍は鼻を鳴らして言った。

「策略というほどのものではないわ。心配はいらない。

恐らく、デイスメルド・マーチの迎撃方法は焦土作戦よ。素人でも思いつく、簡単な作戦ね。でも、有効ではあるわ……」

そう言ったきり、ハツキネンは一人で考え込んだ。

リュティは、これ以上の問答はが自分の関知するところではない
と思い、敬礼しても答礼をしなくなった上官のもとを去った。

しばらくして、ハツキネン自身も外に出た。すると、雪を払って
地べたに座り込んだ兵士達が、星の瞬く寒空を見上げて歓声を上げて
ていた。

「土地が違うだけで、見える星も違うんだなあ」

兵士の呟きにつられて、彼女も空を見上げる。星を見ることが少
ないため、よくはわからなかったが、数が全く違うことだけはわか
った。

夜空には、極彩色の星々が輝いていた。ビーズのように見える星
もあれば、ルビーを思わせる星もある。

「綺麗……」

その呟きで、自分達の司令官が近くにいることに気づいた兵士達
は、立ち上がって敬礼をしたが、司令官は答礼を返さずに言った。

「戦場ではあるまいし、そんなお堅くならなくてもいいわ。みんな
で見ましよう。

もし、あなた達の中で星について詳しい者がいるなら、色々教え
て頂戴」

兵士達は意外そうに顔を見合わせ、ハツキネンのもとへ駆け寄っ
た。

星の名前と星雲の名前を聞いているうちに、コルマール語で“一

破砕者>>ハブート<<”と呼ばれる星が彼女の目に止まった。赤い輝きを放つ大きな星。輝き続けているのではなく、明滅しているように見える。

わたしは、“あれ”になろうとしているのだろうか。彼女は思った。

かつて、巨大な国を一軍で滅ぼし、多くの人を殺した自分。最近では、戦いに疲れを感じるようになってきた自分。どこかで戦いを望んでいる自分。

「戦いの意味を、どこに見出せば良いのだ……」

盛り上がる兵士達の輪から彼女は離れ、自分の幕舎の正面に立った。そして、炎が微かに揺れている松明に手をかざした。

「気づけば……戦いの目的など、忘れてしまうのかも知れない」
彼女は独語し、手をこする。

「だが、戦い自体に意義を見出すようなことにならなければ……良い」

また独語し、彼女は幕舎の中に入っていった。

二月二五日。駐屯地には、戦場へ向かう兵士達の家族や恋人が多く訪れていた。その中には、ハートベイカー父娘の姿もあった。

「お父様！」

小柄な娘は、唯一の肉親である父親に抱きついた。

「シャーリー、行ってくるよ。私が外征している間に寝泊まりする別荘の管理とアンゲルス卿らの世話は、ジェクスに任せておいたから安心していい」

ハートベイカーは笑顔で囁いた。

「はい、わかりました。」

……お父様、どうかご無事で」

シャロンの腕がきつく締まる。

「大丈夫だ、心配ない。將軍というのは最後に死ぬものだ。もし危なくなっても、さつさと逃げてくるさ」

ハートベイカーは冗談半分に囁き、抱きついていた娘を地面に下ろした。

その直後、駐屯地に備えつけられている角笛の低い音が大地を震わせた。

「……さ、そろそろ父さんは出発だ。」

全軍に合図を出せ！」

副司令官の声に、兵士が鷹を象った軍旗を掲げ、一〇万の大軍は出撃した。

窓から身を乗り出したヘルムートは、しかめ面で外を眺めていた。その視線の先には、デイスメルド・マーチ軍の駐屯地が小さく見える。軍旗を一齐に掲げた軍隊が駐屯地から出て行くのを遠目で見送ると、彼は窓から離れた。

「勝てるかな……」

彼は溜息と一緒に呟いた。いかにデイスメルド・マーチに謀将があり、大兵力と豊富な兵站を保持していると言っても、ハートベイカーは完璧な人間ではないだろうし、敵の司令官　クララ・ハツキネンの方が知謀に長けていたら……言うまでもない。

「兵力の多さと補給のやり易さは反比例しますからな」

声のあつた方に振り返ると、ナダルが壁に背を預けて苦笑を浮かべていた。

「いつの間に……」

「勝手に入って申し訳ありません。お姿が見えなかったものですか」

ナダルは肩をすくめた。

「いや、構わないが……」

やはり、お前も危険を感じたか」

「ええ。焦土作戦に出るとなれば尚更です。リドリー元帥は何を考えているのでしょうか」

「自暴自棄だと思うか？」

ヘルムートは彼の肩に手を回し、ゆっくりと言った。

「いいえ、全く。深慮遠謀があつて然りでしょう」

「愚将では元帥になれないだろうから……」

ヘルムートは不安げな表情を見せた。一軍を統率できる中將や大將には、稀に能力の低い人物がいる。社会的身分によって、将官まで登り詰めることもできるからだった。

「しかし、デイスメルド・マーチ連合において、元帥へと昇進する場合は、軍首脳陣からの推薦と兵士達からの信任投票が必要であるため、能力や身分以前に軍全体からの信頼が欠かせません。つまり、信頼の大きさと能力の高さは比例している、というのが大部分でしょう」

「そうだろうな」

答えたヘルムートの不安げな表情は、全く消えなかった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、

個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5892c/>

ヘルムート戦記

2009年7月5日10時15分発行